

タイトル	日本画制作「静物画（花、果物、野菜）」			
学校名	千葉県立 柏中央高等学校	美術	氏名	春日 直美
教材費	約1、200円		実施時間数	10~14 時間

1. ねらい

- ・ 自然の物を観察する力を、デッサンを通して身につけさせる。
- ・ 画材の種類とその表現方法や効果を紹介し、日本画を画材のひとつとして、理解させる。
- ・ 制作を通して日本の美術の特質を知らせることで鑑賞力を高め、生涯学習に繋げる。

2. 材料

生徒： 画用紙、鉛筆、練り消しゴム、水彩絵の具、筆、パレット、水入れ

和紙（雲肌麻紙）、F6木製パネル、トレーシングペーパー

水干（すいひ）絵の具、岩絵の具、膠、金箔、洋箔（金箔に似せた真鍮加工品）、銀箔、

胡粉、墨汁、チャコペーパー、でんぷん糊

モチーフの生花、野菜、果物、貝殻など

教員： 面相筆、削用筆、彩色筆、刷毛、毛氈、電熱器、膠鍋、ミョウバン、砂子筒、砂子筆、箔箸、シッカロール、絵の具瓶、絵皿、水さじ、乳鉢、果物模型、篆刻用石、印刀、油性ペン、カーボン紙、印泥、印矩

3. 展開（時間）

指導の段階と内容	時間	生徒の活動	指導上の留意点	備考および教材
導入	第1時	日本画についての基礎的技法と材料、用具の説明を受ける。	日本画の絵の具の特質を、油絵、水彩画の絵の具との違いを比較することで知らせる。 日本画の専用の用具の扱い方を、実践して見せる。	板書、材料や用具を掲げながら説明を行う。 参考作品
		日本の絵画の歴史的変遷について、映像や文献を見る。	明治時代以前の日本画の歴史的な概要を知らせる。またその特徴を説明する。	プロジェクター、画集
		和紙に「どうさ引き」を試し、その効果を知る。	紙片にどうさを半分引いて乾かしたものを用意しておき、全員に配布する。水を筆にふくませ、どうさ引きの部分とそうではない部分にまたがって引かせる。にじみの具合を確かめさせる	筆、水入れ、和紙
		制作する和紙に、1回目のどうさ引きを行う。	どうさを含ませた刷毛をゆっくり動かし、和紙にしみこませることや、刷毛を一定方向に動かすことに留意させる。	和紙、どうさ、毛氈、刷毛

展開 (表現の 指導)	第2時 第3時	2回目のどうさ引きを、和紙の裏から行う。 静物モチーフのデッサンを行う。 デッサンの合間に、3回目のどうさ引きを、和紙の表側からする。	デッサンは、下図も兼ねている。画面の中で、モチーフをどう構成するかを検討させる。対象を実物大に描かせる。よく観察させ、節目や形の変わり目に着眼するよう指示する。 鉛筆デッサンが終わった生徒から、着彩で色の印象を画面にとどめておくよう指示する。	画用紙、鉛筆、練り消しゴム、水彩絵の具、筆、パレット、水入れ、モチーフ(果物模型、生花、花の模型)
	第4時	下図(デッサン)ができた生徒から、和紙をパネルに仮張りする。 下図をトレーシングペーパーに写し、パネル張りした和紙に、チャコペーパーを挟んで重ね、さらになぞる。	数名ずつ、実演しながら教える。「揉み紙」技法後に、糊で水張りするため、この段階では画鋸で和紙をパネルに留めさせる。チャコペーパーは、色塗りの際に水と混じり、目立たなくなることを知らせる。	和紙、木製パネル、刷毛、画鋸 鉛筆、トレーシングペーパー、チャコペーパー
	第5時	「骨描き」を行う。 「隈取り」を行う。	筆を立て、抑揚のない線でなぞる様指示する。 水干絵の具の溶き方を説明する。梅皿に、絵の具の濃淡を数段階作らせる。モチーフの立体感や、部分の重なり、影になっている部分に濃い絵の具をのせ、絵の具の濃淡を、水を含んだ筆でぼかしながら表現することで、後にのせる絵の具の色の深みやモチーフの質感に影響することを知らせる。	面相筆、墨汁、絵皿 水干絵の具(藍、代赭色)、膠、彩色筆、梅皿
	第6時 第7時 第8時	着彩を行う。 背景は泥絵の具か、白、15番の細かい絵の具で	岩絵の具、胡粉の溶き方を説明する。岩絵の具が、下地の色を被膜することなく効果的に透かすことを	岩絵の具、胡粉、彩色筆、膠、絵皿、乳鉢

	第9時	<p>下地塗りを行い、2回目の塗りで岩絵の具を塗る。 2回背景を塗って乾いた作品に「揉み紙」を行う。</p> <p>和紙を一旦はずし、水張りをを行う。</p> <p>モチーフ固有の色を着彩する。</p> <p>「砂子」を背景に蒔く。</p> <p>作品の乾き待ちの生徒から篆刻を行う。</p>	<p>知らせ、背景に空気感や画面全体の雰囲気を作ることを指示する。 皴の付け方に留意して、モチーフ部分にはなるべく皴がつかないように気をつけさせる。</p> <p>岩絵の具はなるべく混色を行わず、下に塗った色に違う色を重ねることで、色の変化や深みを出す効果があることを知らせる。</p> <p>日本画に特徴的な工芸的で、また象徴的な背景づくりを目指させる。</p> <p>作品のサインとして氏名を石に彫らせる。印刀の握り方を説明する。</p>	<p>水入れ、刷毛、でんぷん糊</p> <p>箔、砂子筒、砂子筆、どうさ、箔箸</p> <p>篆刻用石、印刀、油性ペン、カーボン紙</p>
整理	第10時	<p>作品に印を押して、作品を完成させる。</p> <p>生徒作品を相互に鑑賞する。</p>	<p>印泥の扱い方を説明する。</p> <p>実物投影機で作品を掲げたり、各自で自由に机の間を巡回させる。</p>	<p>印泥、印矩</p>

生徒作品





4. 指導上の留意点

「和紙に「どうさ引き」を試し、その効果を知る」

和紙は、画用紙のように、細かいパルプでできているものと違い、繊維が長く丈夫であることを説明する。「どうさ」は膠とミョウバンを水に溶かしたもので、紙のしみ止めの効果があることを説明する。あらかじめ準備した紙片にどうさを半分引いて乾かしたものを全員に配布し、水を筆にふくませ、どうさ引きの部分とそうではない部分にまたがって引かせ、にじみの具合を確かめさせる。

「静物モチーフのデッサンを行う」

画用紙に、モチーフのおおよそ実物大のデッサンを、鉛筆で行わせる。まず画面全体の中でモチーフをどう配置するかを考えさせる。デッサンの細部を描き込む際には、よく観察させ、節目や形の変わり目に着眼するよう指示する。若干の影を描くことで、立体感や質感を表現することを知らせる。

「どうさ引き」

制作する和紙にどうさ引きを表から2回、裏側を1回、デッサンの合間に乾かしながら行わせる。

「骨描き」を行う」「隈取り」を行う」

抑揚のない、一定の線の太さで描く筆法を、骨描きということを説明する。「隈取り」は、歌舞伎役者が顔に皺や立体感を施す化粧のことを表していることにも説明時に触れ、モチーフの立体感や、部分の重なり、影になっている部分に濃い絵の具をのせ、絵の具の濃淡を、水を含んだ筆でぼかしながら表現することで、後にのせる絵の具の色の深みやモチーフの質感に影響することを知らせる。筆の動かし方については、板書で図説を行う他、個別に指導する。



「着彩を行う」

共用机に膠鍋、絵の具瓶、膠、水入れを用意し、生徒が必要に応じて絵の具を溶く状況にする。絵皿に水さじ半杯の絵の具をとり、それに膠1杯を入れて、指でよく練ってなじませてから、水をさじ2~3杯入れるよう指示する。

「水干絵の具」は通常ポロポロの破片状に売られている。粉状にしてから使用するために、必要な量の絵の具を紙片にあけて紙片を二つ折りにし、太い軸の筆を手のひらで転がして絵の具を潰し

たり、乳鉢で擦って使用するが、時間短縮のため、あらかじめすり潰しておいたものを用意する。

「岩絵の具」は砂状のため絵の具皿に沈殿するので、皿をやや傾けて筆にすくい、軸を立てて画面では絵の具を「置く」または「たらす」ような感じで塗るよう指示する。

「揉み紙」を行う」「砂子」を蒔く」

日本画特有の、工芸的な技法として行う。余白を抽象的、象徴的に表現することが、古来の西洋画にはない表現であることを生徒に説明し、背景の表現を意識させる。

「篆刻を行う」

自分の氏名を作品に表すことで、作品への自己表現、自己肯定感をもたせる。

5. 資料・参考文献

「日本画 表現と技法」武蔵野美術大学日本画学科研究室編 武蔵野美術大学出版局 2002年

「日本画 画材と技法の秘伝集」小川幸治著 日貿出版社 2008年

「日本画 材料と表現」美術出版社 1982年（絶版）

「和紙の手帖」全国手すき和紙連合会 2002年

「手漉き和紙」トーレン出版部 1983年

「趣味の金銀箔 色紙・料紙づくり-箔の基本技法のすべて」飯島秀雄 マール社 1992年